

高校生・大学生のイスラーム理解と世界史¹

三 浦 徹

信州イスラーム世界勉強会代表
お茶の水大学名誉教授・(公財)東洋文庫研究員

1. イスラームのイロハ

2001年米国での9・11(「同時多発テロ」)事件のとき、日本中東学会の事務局を担当していた関係でマスコミからの問合せを受け、取材者の「イスラームのイの字も知らない素人なので、専門家として分かりやすく説明してください」という台詞にひっかかりを覚えた。たしかに、中東やイスラーム世界についての日本での知識の蓄積は欧米に比べて少ないかもしれない。しかし、対象が欧米のことであれば「アメリカのことはよく知りません」と言えただろうか。つまり「中東・イスラーム世界」は紛争がたえず「分かりにくい」、だから「知らなくても仕方がない」という先入観があるように思えた。その裏返しとして、現代政治の問題を、「アッラー」や「砂漠」的思考が原因だとするような短絡的な識論もみられる。

かくいう私自身も高校生や大学生のころは、イスラームのイも知らずにいた。1973年10月に第4次中東戦争(オイルショック)が起こったときに、「なぜヨーロッパで虐げられたユダヤ人と、ヨーロッパの植民地支配を受けたアラブ人が争っているのか?」という素朴な疑問をもち、板垣雄三先生の「アラブ近代史」を受講したのが、アラブやイスラームとの出会いとなった(当時大学3年生でドイツ地域研究のコースに所属していた)。

2. 高校生・大学生のイスラーム認識: アンケート調査から

このとき日本中東学会では、中東・イスラーム世界の理解を広く深くするための取組みを始めた。その矢先、松本高明教諭(当時都立高校教員)が、社会科中東研究会の教員の協力をえて、首都圏の高校生のイスラーム認識についてアンケート調査を実施していることを知り、その集計データをお借りするとともに、勤務先の大学生(お茶の水女子大学)を対象に同じアンケートを実施し、『日本中東学会年報』に、両者で論文を寄稿した。²

このアンケートから、高校生や大学生のイスラームに関する知識として、その教義・習慣(礼拝、断食、禁酒など)についてよく知っているにもかかわらず(正答率60%以上)、ユダヤ教やキリスト教と同じ一神教である、科学の発展に貢献した、日本や中国と同じく書道芸術が盛んであるといった他の宗教や文化との「共通性」について、ほとんど理解していないこと(正答率30%以下)が判明した(図1参照)。

¹ 本稿は、「高校生・大学生のイスラーム理解と世界史教育」『歴史と地理』第614号(2008年5月)をもとに、その後の知見を加えて、改稿したものである。

² 松本高明「日本の高校生が抱くイスラーム像とその是正にむけた取組——東京・神奈川の高校でのアンケート調査を糸口として」『日本中東学会年報』第21/2号、2006; Toru MIURA, "Perceptions of Islam and Muslims in Japanese High Schools: Questionnaire Survey and Textbooks"『日本中東学会年報』第21/2号、2006。

教義・習慣

正答率 高: 礼拝、断食、豚肉、飲酒、4人妻(異質性)
 低: 一神教、書道、科学(共通性)、黒いベール、聖職者に服従

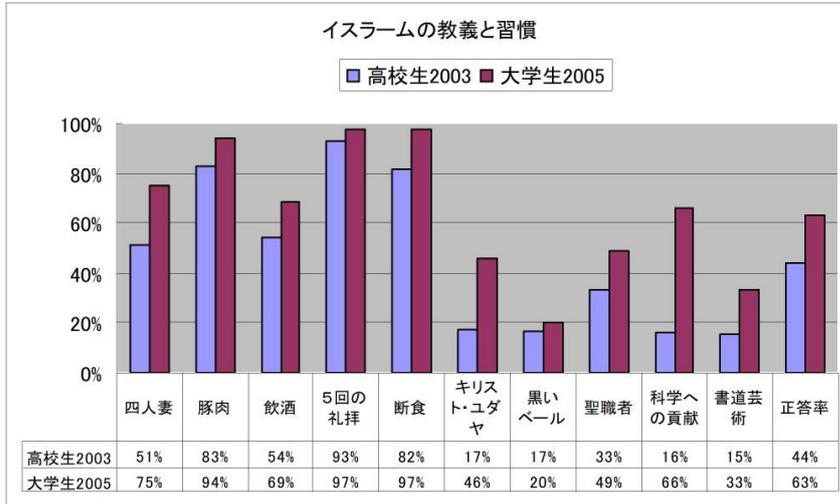


図1 イスラームの教義と習慣についての知識

第二に、イスラームのイメージについては、高校生も大学生も、「厳格に教義」を守り、「奇妙な習慣」をもち、「結束力が強く」「不寛容」で「攻撃的」「不可解」という、画一的なイメージを強くもっていることが判明した(図2、3参照)。松本氏は、このような傾向が、イスラームについての知識や関心をもつ生徒の方にむしろ強く見られることを指摘しており、また高校でイスラーム世界の多様性や他地域との交流について学習した大学生も、やはり画一的なイメージをもっている。このことは、イスラームについての知識が少ないから誤ったイメージを抱くのではないことを示唆している。このようなイメージが創られていく原因はどこにあるのだろうか? 知識があるほど誤ったイメージをもつとすれば、私たちはどのように学ばばいいのだろうか。

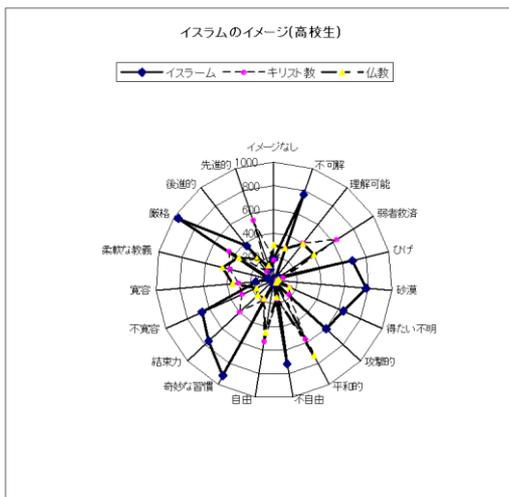


図2 イスラームのイメージ(高校生)

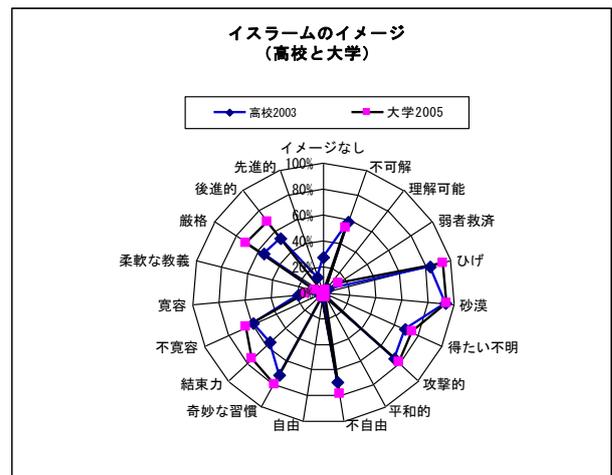


図3 イスラームのイメージ(高校生と大学生)

3. 知識と認識のずれから生じる誤認

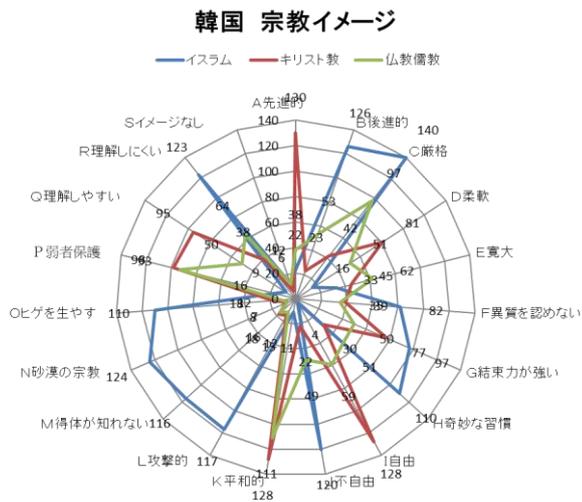
アンケート調査で、60%以上の高い正答率を示している「1日5回の礼拝」「禁酒」「断食」「豚肉を食べない」という項目は、現代日本人の習慣と大きくかけ離れており、「奇妙な」習慣をもち独特な教義を堅持していると受け取られやすい。他方、低い正答率を示しているのは、他地域との「共通性」の側面である。つまり、異質性が強調され、共通性の側面が知られていないのである。そこへ「自爆テロ」や「戦争」の報道がくれば、自分たちとはかけ離れた独自の教義・習慣をもった宗教であり、それゆえに不可解な事件が起こると短絡的に考えてしまうのかもしれない。

このようなイメージは日本だけのものなのだろうか?このアンケート調査の結果については、2005年のアジア中東学会大会(韓国、プサン)で口頭報告し、その後英語論文として発表し、アジアや欧米の研究者に意見を求めている。³これに呼応して、韓国中東学会のLee Hee Soo 教授は、2008-09年に韓国の5つの中学・高校で同様のアンケート調査を実施した(回答数 289)。それによれば、韓国の生徒もまた、イスラームの教義・習慣について高い正答率を示すのに対し、一神教・科学・書道芸術といった他文化との共通性については低い正答率であった。また、イスラームのイメージについても、日本と同様に、「後進的」「厳格」「不自由」「理解しにくい」といった画一的な傾向が見られた(図4参照)。

また米国でも、9.11事件以降、イスラームへの攻撃的論調が目立ち、その理解は重要になっている。スタンフォード大学の国際文化教育プログラム(SPICE)では、多文化理解のためのテキストを作成しており、文化からイスラームを理解する教材を刊行している。中東・イスラーム理解の問題は、世界大の課題となっている。

ここには、グローバル時代における他文化理解の問題が潜んでいる。メディアを通じあるいは直接の接触により、あるいは人づての伝聞により、他の地域の人々の行動や文化についての情報が増えている。そこでは、異質性を感じる機会もあるだろうが、共通性を探る姿勢がなければ、異質で不可解、という短絡的な結論に陥りやすい。第二に、イスラームについての知識とイメージの調査からわかるように、教義や習慣についての個々の知識は間違いではないにもかかわらず、全体の位置づけによって、誤った認識を生むことになる。

では、他文化に、イスラーム文化にどのように接すればよいのだろうか。ここで興味深いことは、中東に滞在経験をもつ日本のビジネスマンや国際協力派遣者を対象に行ったアンケート調査結果である(2007年実施)。⁴第一に、近隣の人々との接触については、17.3%が頻繁と回答し、アラビア語を少しでも用いる率は27.9%となっている。中東に来る前は38.6%が生活について不安を持っていたが、



³ 注2参照。

⁴ 加藤博研究代表「ニーズ対応型地域研究アジアのなかの中東:経済と法を中心に」が、国際社会貢献センターの協力をえて、実施した。

65.9%は3ヶ月以内で適応できたと回答している。また、中東についてのイメージが良くなったものが39.2%、悪くなったものは16.7%、イスラームのイメージが良くなったものが35.7%、悪くなったものが3.6%となっている。これらの回答から、現地中東におけるアラブ人やムスリムとの直接の接触が、そのイメージや理解を改善していることがわかる。

3. 高校の教科書と教育

高校の教科書では、中東やイスラームは、どのように扱われているのだろうか。第二次世界大戦後から2004年までの世界史教科書における中東に関する記述量は、全体の8%から12%を占めており、十分かどうかは別として量的にみて過少とはいえない。記述内容では、イスラームという要素が前面にでて(イスラーム帝国、イスラーム社会、イスラーム文化)、同時にイスラームの「普遍性」「寛容性」「融合性」が強調されている。しかし、記述の多くは18世紀以前の出来事に偏り、前近代の繁栄とは対照的に、近現代では欧米列強による植民地化や中東戦争など「衰退」や「混乱」が前面にでてくる。生徒にとっては、イスラーム世界は前近代には繁栄していたが、宗教に固執し、近現代は没落し混乱している、というイメージが喚起されやすい。

日本の世界史教育では、東アジア、東南・南アジア、西アジア、ヨーロッパの諸地域の文化や歴史の独自性を尊重し、それぞれの地域の歴史を専門とする研究者が教科書を執筆する傾向がある。このため、人名・地名・用語・事項が増え、情報量が過大となり、生徒はバラバラに事項を覚えるだけの学習(「丸暗記」)に陥りがちとなる。この問題について、小川幸司教諭(長野県高校教員)は、2009年に「苦役の道は世界史教師の善意で敷きつめられている」という刺激的なタイトルの論文で警鐘を鳴らした。⁵それによれば、世界史教科書の索引項目数は、1300(1952年)から、2250(1962年)、3400(2003年)と50年間で2.6倍にふえ、単位数(授業時間数)が削減された「世界史探究」の教科書(T社)でも3600となっている。

これに対し、米国の高校の世界史の教科書は、日本のその3~4倍の1000頁という分量で、中東に関する記述量は日本と同程度の8~11%であるが、各章をすべて学習する必要はなく、社会科学として整理・分析の方法を学ぶことに重きがおかれ、いくつかの章を選択し、資料(材料)をもとに考え、議論する。ヨーロッパの歴史教科書は、基本的に自国およびヨーロッパの歴史だけを扱っており、中東のみならず、日本も含め、アジアやアフリカの地域の歴史は、ヨーロッパの歴史と関係する事項(たとえば、十字軍や香料貿易や奴隷貿易など)についてのみ、説明される。大学におけるアジアに関する教育・研究は、東洋学(オリエンタリズム)として別立てになっていて、そこでは、言語・宗教・法・歴史・文化等当該地域に関することがすべて扱われる。⁶

地理の教科書では、乾燥地帯の例としてとりあげられることが多く、そこでは、宗教文化としてのイスラームや現代の石油産業もとりあげられるが、かえって類型的なイメージを与える。また倫理の教科書では、「厳格な」一神教、「政教一致」が強調される。いずれも、「異質性」が前面にでるのである。倫理の教科書では、「きびしい自然環境のなかで確立されたイスラーム教は、やさしさ、あたたかさ、あいまいさを好む日本人の性格とは正反対の、冷厳な力強い特色をそなえている。確かな未来を心に描くことが困難な現代において、この鮮烈さが人びとをひきつける魅力となっている」(S社、2001年)といった

⁵ 小川幸司「苦役の道は世界史教師の善意で敷きつめられている」『歴史学研究』第859号、2009。

⁶ Miura, "The Middle East in Studying and Teaching World History in Japan"『日本中東学会年報』第28/2号、2012。

記述がある。これは、哲学者和辻哲郎の『風土』(1935 年)に示された、砂漠＝対抗・戦闘的(西アジア)、モンスーン＝受容・忍従的(東アジア)、牧場＝自発的合理的(ヨーロッパ)という類型を踏襲したものである。他方で、2015 年の教科書では、「唯一の人格神を信仰する宗教にイスラームがある。現代の政治や社会の動向にも深くかかわっている。クルアーンをもっとも重要な源泉としているが、預言者たちの示した範例(スンナ)などにもとづいて、婚姻や相続、契約などの社会生活全般に関するこまかな規則まで定めている。神のために自己を犠牲にして戦うこと(聖戦、ジハード)も、ムスリムに課せられた責務である」(D 社)という記述がある。教義についての詳しい説明がなされているが、不正確な記述(下線部)があり、「厳格」な宗教といった一面的な理解を助長している。

2022 年から施行された高校の新学習指導要領では、地理歴史と公民の二つの教科について、大幅な改定が行われている。歴史については、日本史と世界史を統合し、近現代の大きな変化(近代化、大衆化、グローバル化)を学ぶ「歴史総合」という科目を新たに設けて必修とし、これを踏まえて、「世界史探究」「日本史探究」を選択して学習する。地理については、新たに設けた「地理総合」を必修とし、「地理探究」を選択科目としている。公民については、これまでの現代社会、倫理、政治・経済の3本立て(いずれかを選択必修)にかえて、新たな必修科目として「公共」を設け、倫理や政治・経済を選択科目とした。いずれの科目においても、現在の学校教育法が育成すべき資質・能力として掲げる「学力の3要素」、すなわち①基礎的な知識・技能 ②思考力・判断力・表現力③主体的に学習に取り組む態度が重視され、問いを立て、資料(データ)にもとづき、考えることが、教科書のなかに、取り入れられている。これに対応した指導書や参考図書が出版されているが、歴史教育について、どこまで、暗記中心の学習をかえうるのかは、これからの現場での取組しだいである。⁷

4. 日常のなかに中東を掘り起こす

日本イスラーム協会では毎年春と秋に公開講演会を企画し、日本中東学会は、2006 年度からは、「日常のなかに中東を掘り起こす」というテーマで講演会を継続して開催することとし、同年7月には「教育現場の中での中東・イスラーム」と題し、全国歴史教育研究協議会の協賛をえて、高校、大学、新聞社、NPO で活動する者が問題提起を行った。川上泰徳氏(朝日新聞社、当時)は、「報道機関としては「自爆テロ」がネガティブなイメージをまき散らすとしても、いま現在起こっていることを報道する責務がある。しかしイスラームとは何なのかを知りたいという声もあり、ニュースの背後にあるイスラームをバランスよく理解するチャンスでもある。私見では、ムスリムの行動は不可解ではなく、違うルールで同じスポーツをやっているのではないか」と述べた。また、田中好子氏(NPO パレスチナ子どものキャンペーン)は、「同時代人として、同世代としての共感と共通性を知らせたいし、そこでは子どもたちも含めて、スッと入っていける」と語っている。

2006 年 11 月には山口市において「地方における中東・イスラーム:尾崎三雄氏の事績を中心に」と題する講演会が、山口県教育委員会などの協賛をえて、開催された。山口県では、この講演会にむけて、下関南高校、山口高校、徳山高校らの教員と高校生による自主研究活動として、「山口から考える中東・イスラーム」高校生プロジェクトが組織され、その研究発表があわせて行われた。高校生たちは山口県在住のムスリムや日本人の中東滞在経験者を訪ねてインタビューを行い、その発表では、ムスリムのなかでの多様性と、日本人や日本社会との共通性が発見されていた。この企画は、1930 年代に

⁷ 小川幸司『世界史とは何か:「歴史実践」のために』岩波新書「シリーズ 歴史総合を学ぶ③」、2023、参照。

アフガニスタンに農業技術指導に滞在した尾崎三雄氏の残した資料の発見と研究が始まったことをきっかけとし、高校生たちは尾崎宅にも訪問し、旧家の土蔵に残されていた当時の資料や写真機、ブルカ(女性のヴェール)などに触れた。⁸日本 VS イスラーム世界という構図ではなく、山口からアフガニスタンへという、地域から地域への理解の道が切り拓かれた。

5. 共通性を糸口に:大学での授業

私自身が大学で担当する「中東・イスラーム世界」を主題とした授業では、最初に、先の高校生・大学生のイスラーム理解のアンケートの結果(問題点)を示し、違い(異質性)の強調ではなく、共通性を意識的に発見する姿勢の必要を説く。具体的な材料としては、カイロのブティックで、ショーウィンドにある赤いミニスカートと半袖のブラウスをしげしげと眺めるベール姿の女性の写真を示し、彼女たちは、ベールを被っているけど、日本の女子大生と同じように、ファッションや恋愛や結婚や仕事に強い関心をもっている、と投げかける(図5、この写真は、高校世界史の教科書にも掲載された)。あるいは、お茶の水女子大学のアフガニスタン女子教育支援事業(2005年)での大学生との交流会における、アフガニスタン教員からの「日本人はイスラームそのもの、人を愛し、殺さない、教育を大事にし、困難があっても前に向かう」という発言を紹介し、彼女たちにとって、イスラームとは、礼拝や断食といった儀礼ではなく、生き方の問題であり、それゆえに日本人の生き方に共通性を見出したのだ、と説明する。



こうした序論のあと、自然環境から、家族・女性、教育、商人と職人、都市、法と秩序といった、どの地域にも共通するテーマを扱う。2005年の授業では、初回にまず、シリア土産のクッキーを配り全員に食べさせた。学生の反応は「意外に美味しい」というもので、つまり美味しいはずはない、という先入観があるのである。つぎにドバイ空港とダマスカスの交差点のビデオをみせた。ドバイ空港は、日本から毎日直行便が乗入れ、欧州やアフリカへの乗継ぎ地として24時間免税店が営業し、アジアからアフリカまで多彩な人々が往来し、ビデオショップには「名探偵コナン」などの日本版アニメが並んでいる。他方、ダマスカスの交差点の光景(右写真)については、「ビルがある、車が多い、普通の服装をしている」という感想が出される。私の意図は信号を使わずに車の間を横切る歩行者にあり、一見すると無秩序に見えるが、横断のコツは運転手とアイコンタクトをとることで、信号のような一律の秩序もあれば、パーソナルな関係にもとづく秩序もあることを指摘する。先述の川上氏の言うルールの違いである。



「家族」「教育」「契約」といった各論では、現代日本とも比較しながら、毎回簡単なコメントの提出を学生に求め、次回の授業の冒頭でフィードバックした。最終回は学生のグループ発表とし、授業で取りあげた規範(モデル)と地域や時代による実態の異同について、学生自らが材料を集め、発表する。

⁸ 山口県高校教員藤村泰夫氏らの企画による。尾崎三男氏資料(約200点)は、アジア経済研究所 IDE-JETRO において整理され、「尾崎三雄アフガニスタン資料コレクション」として、目録等が公開されている。(<https://www.ide.go.jp/Japanese/Library/Collection/ozaki.html#01>)

材料を探すツールとしては、(公財)東洋文庫と日本中東学会が協力して作成・更新している「日本における中東・イスラーム研究文献データベース」(明治から現在までの日本人によるまたは日本で刊行された文献のオンラインカタログ、65000件を掲載)⁹の利用を推奨しているが、現在では、インターネット検索ツールによっても、画像や動画を含め、より広く材料を探すことができる。学期末のレポートの課題は「実は xxである」とし、任意の資料 source(歴史史料、文学、絵、建築、映像、ドキュメンタリーなど)を用い、本講義であつかったテーマ(問題)を自分の眼で考察する。これらのレポートでは、「意外にフツウ」「ありのままにいられるだけの強さと寛容さ」「それぞれの居場所があり共生している」といったまとめがみられた。中東やイスラームとの距離が縮まり、身近に感じたことがわかる。

また「グローバル・ヒストリー」という科目では、米国の大学生用の「諸世界の歴史」と題する英文テキストを用い、古代中国・インドから現在まで 12本の論考を読みながら、それぞれの時代・地域が、「世界」の「歴史」のなかでどのような位置にあるのかを、現在の地点からみて議論する。いずれの論考もマクロな視野と比較の視点から問題を提示するもので、学生の反応は「歴史の授業のイメージが変わった」という。¹⁰

研究にせよ教育にせよ、具体についての正確な知識や情報が重要なことはいままでもない。しかし、その知識や情報がどのような枠組みに置かれるかによって、その意味は大きく異なってくる。不足しているのは、中東と「世界」をつなげる理解のフレームであり、中東に関する事実を、グローバルな地域軸と時代軸のうえに位置づけて、身近な問題として考える必要がある。

略歴:

三浦 徹 (みうら とおる)

お茶の水大学名誉教授、(公財)東洋文庫研究員

アラブ・イスラーム史、中東地域研究、都市研究(ダマスカス史)

東京大学教養学部教養学科卒業(1975年)。(株)平凡社に勤務し、雑誌『別冊太陽』、日本イスラーム協会編『イスラーム事典』(1982)、E・サイド『オリ。エンタリズム』(1985)などの編集を担当(1975-84年)。1984年に大学院に入学、東京大学大学院人文科学研究科(東洋史専攻)修了(1986年)。お茶の水女子大学文教育学部教員(比較歴史学コース、グローバル文化学環、1990-2017年)、同理事・副学長(教育担当、2007-08、2017-21年)。

著作:『イスラームの都市世界』(山川出版社、1997)、編著『イスラーム都市研究:歴史と展望』(東京大学出版会、1991、同英語版 1994)、共著『イスラーム社会のヤクザ:歴史を生きる任侠と無頼』(第三書館、1994)、編著『イスラーム世界の歴史的展開』(放送大学教育振興会、2011)、編著『イスラームを学ぶ』(山川出版社、2015)、ラピダス(太田啓子との共訳)『イスラームの都市社会:中世の社会ネットワーク』(岩波書店、2022)。ダマスカス郊外の街区の成立と変容を扱った英文研究書 *Dynamism in the Urban Society of Damascus: The Šālihiyya Quarter from the Twelfth to Twentieth Centuries* (Leiden, 2016)など。

⁹ 東洋文庫イスラーム地域研究資料室のウェブサイト(<https://search.tbias.jp/>)において、オンライン検索ができる。後藤敦子「日本における中東・イスラーム研究文献データベース:過去から未来へ 公益財団法人東洋文庫研究部イスラーム地域研究資料室ウェブサイトの紹介」『東洋学報』、第106/2号を参照。

¹⁰ 三浦徹「イスラーム世界はなにを語るか:双方向的なイスラーム理解」『日本歴史学協会年報』第31号、2016、を参照。